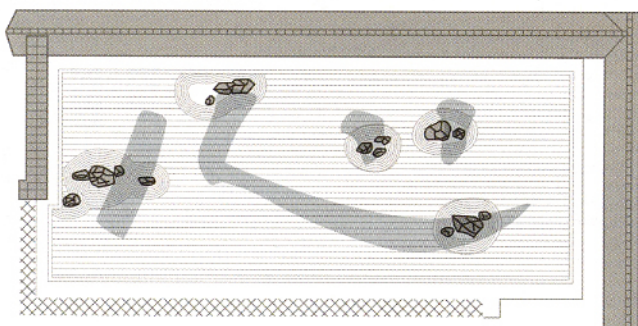


日本の色① 墨色：書道や水墨画などで使う墨の色。枯山水の庭園はその色合いから水墨画を思わせる。

### 龍安寺石庭の特徴

東西約25m、南北約10m。三方を油土堀で囲み、境内の植栽を借景としている。油土堀は奥に行くに従い低くなり、奥行きを感じさせる。白砂を敷き15個の自然石を配する。15の石が東から7・5・3で構成されていることから「七・五・三の庭」と言われたり、虎が3匹の子を連れて川を渡る姿を表現しているという説から「虎の子渡しの庭」とも言われている。また、その石の配置から「心」という文字を見ることが出来る。春には満開の桜（右ページ写真）、秋には紅葉、冬には雪景色など、背後の借景とのバランスも重要な一部。2004年の修復で赤や緑などの元の岩の色が出現し、話題を呼んでいる。

15の自然石を配する龍安寺石庭。方丈の間から全体を見渡すように構成されているが、一度にそのすべての石を観ることは決してできない。作庭の年代や作者、制作の意図については様々な説が存在する。



### 枯山水（石庭）とは

日本庭園の一種。その発展には禅宗の思想が大きく影響している。水を使わずに、小石や砂で川や海を表現し、岩を置いて山や島に見立てた観念の庭である。砂や岩はあくまで見立てにすぎず、観る人によって思い思いの解釈ができる。池泉式のように「観て楽しむ」庭ではなく、「対話する」庭であると言える。

### 茶庭も併せ持つ龍安寺

つくばい：茶室藏六庵にある手水鉢。つくばって使うことからこの名がついた。中心の「口」の字を共有し、「吾れ唯足ることを知る」と読ませる。知足のものは貧しといえども富めり、不知足のものは富めりといえども貧し、という禅の格言を図案化した無言の悟道である。徳川光圀の寄進と伝えられている。写真は方丈裏のレプリカ。



侘助：ツバキ科の常緑高木。茶花として好まれ、茶庭によく見られる。葉はツバキより細く、白や赤、または赤地に白斑の花を咲かせる。名前の由来は茶人・笠原侘助が好んだからとも、侘助という人が文禄・慶長の役の際に中国大陸から持ち帰ったからとも言われている。龍安寺には日本最古の侘助の木がある。



## 枯山水の代名詞、龍安寺石庭を知る



Akiharu Iwata

岩田晃治氏  
1963年岡山県生まれ。京都産業大学経営学科卒業。公認会計士事務所勤務を経て、現在龍安寺管理責任者。学芸員。

せんと  
ひたひた  
のふれ

# 「枯山水」で対話する

連載第十七回 禅の心で無駄をそぎ落とした独自の庭園

真の国際化とは自分の国を知ること。砂と岩で世界を表現し、観る者の「心」に解釈を委ねる枯山水。その素晴らしい時間は時間をかけて味わいたい。

text by 渡辺幸裕 (案内人) + photographs by 宮田昌彦

### 対話する日本庭園

前回（4月19日号）、池泉式庭園を取り上げたが、今回は日本独自の庭園様式である枯山水に関して調べてみた。水を一切使わず砂と岩だけで海や島、そして世界を表現する枯山水は、鑑賞する池泉式に対して、「対話」するように構成されている。枯山水と言えは龍安寺の石庭。あまりに有名すぎるという意見もあるかもしれないが、まずは世界に知られたこの石庭を知ることが枯山水になじみたい。今回、誰もいない早朝の石庭という素晴らしい雰囲気の中で、龍安寺の岩田晃治氏に、ガイドブックにはない石庭の見方や裏話など様々な話を聞かせていただいた。

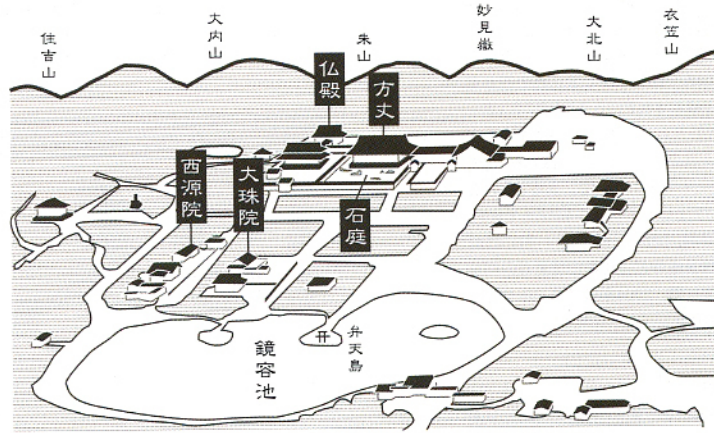
龍安寺には年間80万人、多い日には1日7000人が訪れる。混雑した状況でゆっくり鑑賞するのは困難だが、興味深いことにほとんどの日本人がすーっと見て帰るのに対して、外国人の中には、2時間じっくり庭を見ている人が多いという。

京都に来る外国の方は日本文化に興味を持っている人が多いので



# 心静かに、時間をかけて

## 龍安寺の全容



### さらに深める参考情報…

#### 【書籍】

『龍安寺石庭を推理する』  
(宮元健次著、集英社新書)

『京都名庭園』 Suiko books116  
(水野克比古撮影、光村推古書院)

#### 【ウェブサイト】

龍安寺  
http://www.ryoanji.jp/  
ウェブタウン京都(大徳寺大仙院)  
http://www.digimake.co.jp/webtown/  
kita/daisen/daisen.html  
日本庭園の美  
http://www.ifnet.or.jp/chisao/  
会員制有料サイト ジャパン・ナレッジ  
http://www.japanknowledge.com/

### —— 枯山水に出かける装い ——

無地のボカシ染めの着物が、春の日差しを思わせる。瓦をモチーフにしたしゅれた色使いの帯をコーディネート。(井上里美さん=読者、人材採用総合サービス会社勤務)



新緑のさわやかな季節にぴったりの緑の縞の着物。透けた感じが涼やかな陣羽織をコーディネートして、初夏の清涼感を演出。(渡辺幸裕)

着物撮影協力/銀座もとじ

### 大雲山龍安寺

徳大寺家の別荘を、1450年管領・細川勝元が譲り受けて寺地とし、妙心寺の義天玄承を開山として創建された。応仁の乱で焼失したので、1488年に再興したが、1797年火災で方丈・仏殿・開山堂などを失った。現在の方丈は西源院の方丈を移築したもので、山門をくぐると鏡容池を中心とする池泉回遊式の庭園が広がる。ここもまた四季折々の素晴らしい風景を堪能することができる。

行き方：JR「京都」駅下車  
市バス50で「立命館大学前」下車、徒歩7分

## 京都の枯山水

大徳寺大仙院：北区紫野大徳寺町54-1  
地下鉄「北大路」駅からバスで「大徳寺前」下車、徒歩5分  
南禅寺金地院：左京区南禅寺福地町86-12 地下鉄「叡上」駅から徒歩7分  
妙心寺退蔵院：右京区花園妙心寺町35  
JR「花園」駅から徒歩8分

曼殊院：左京区一乗寺竹ノ内町42  
叡山電鉄「修学院」駅から徒歩20分

円通寺：左京区岩倉幡枝町389  
地下鉄「北山」駅からバスで「円通寺道」下車、徒歩10分

酬恩庵：京田辺市新里ノ内102  
近鉄京都線「新田辺」駅から徒歩20分

龍安寺に行ったことはあっても、このような目で庭と対話した経験がある人は少ないと思う。

### ゆつくりと自己を見つめる

じつくり向かい合うと、自分だけが庭を観ているような気持ちになったり、庭の中に溶け込んでいく感覚になるのだそう。坐禅を組んで自然な気持ちになることに相通じるものがある。

当然かもしれないが、「対話する庭」を多くの日本人が表面しか見ているのは残念なことだ。一軒でも多くの寺を回ろうと慌ただしく訪れるのでは絶対に得られないものが、静かに座ってこの庭を観ていると得られるのである。

この庭が造られた時期は室町末期、江戸初期など諸説あり、作者も判明していない。どの時代に誰が造ったにせよ、現代人の心をも動かすような素晴らしい庭を造ってくれたのは我々のご先祖様である。枯山水を造った才能の持ち主がこの国にいたことを認識し、現代の生活に、そして次世代の日本人のために役立てたいものだ。

日本人の知恵と才能は限りない。今も生きている素晴らしい遺産を現代の我々が活用しない手はない。ビジネスの疲れを癒す、自分を見つめる、顧客を案内する、どのような理由であつてもよい。通りすがりの観光ではない龍安寺の石庭訪問をお勧めする。

この庭が造られた時期は室町末期、江戸初期など諸説あり、作者も判明していない。どの時代に誰が造ったにせよ、現代人の心をも動かすような素晴らしい庭を造ってくれたのは我々のご先祖様である。枯山水を造った才能の持ち主がこの国にいたことを認識し、現代の生活に、そして次世代の日本人のために役立てたいものだ。

### 【告知】

#### 日本かぶれの会

今回の「枯山水」をテーマとするイベントは、龍安寺訪問を考えておりますが、次号のイベントと合同で行う予定にしております。詳しくは次号のイベント告知コーナーをご覧ください。